

## メッセーヂ

池田大作

インド文化国際アカデミー、東洋哲学研究所、インドSGIの共催による「法華経——世界の精神遺産」展の開催、誠にありがとうございます。

本日はお忙しいなか、ご列席くださいました皆さま、また開催にご尽力下さいました皆さまに対して、心より御礼申し上げます。

私の尊敬してやまないロケツシュ・チャンドラ博士には全面的なご賛同とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

東洋哲学研究所はこれまで、ロシアの東洋学研究所

サンクトペテルブルク支部との共催で、日本、オーストリア、ドイツにおいて、「法華経とシルクロード」展を開催してまいりました。

このたび、「仏教発祥の国」であり、「法華経の故郷」であるインドにおいて、「法華経——世界の精神遺産」展が開催されますことに対して、私は、大変に深い意義を感じております。

チャンドラ博士は、昨年発刊した私との対談集『東洋の哲学を語る』のなかで、「インドで生まれた仏教は、幾世紀もかけて、中国へ、韓・朝鮮半島へ、日本へと

伝わりました。そして、今、SGIによって、『法華経』が日本から世界に広まったのです。太陽が東から西へ移動するのと同じく、『法華経』も東から西へと「旅」をしています。世界の各国を旅しています。素晴らしいことです」と語っておられます。

「法華経の故郷」において、「法華経——世界の精神遺産」展を共催できますことは、私どもにとって、貴国の大恩に報いることであり、大いなる喜びであります。

今回共催の、インド文化国際アカデミーは、世界的な東洋学者・言語学者として知られたラグヴェイラ博士が、東洋の精神的遺産を未来に伝えたいと、一九三五年に創立された、インドを代表する「仏教学・東洋学」の研究機関であります。

ラグヴェイラ博士は、「文化こそが、生命の力を開花させるものであり、人間を最高のレベルへと高めるものである。また、文化はそれぞれの国によってさまざまであり、世界各国の文化を研究し、理解することが必要である。そして、単に過去の歴史を研究するだけで

はなく、新しいものを創り出すことに貢献するものでなければならぬ」との信念をもっておられました。

特に、仏教文化を中心に研究するため、国家的事業ともいべきアカデミーの創立を、一民間人の力によってなされたのであります。

この父君が発案された、膨大な東洋の文献を集めた『シャタピタカ(百蔵)』出版シリーズは、現在、チャンドラ博士に引き継がれ、世界に誇る大文化事業として展開されております。

一九九八年、チャンドラ博士は日本で開催した「法華経とシルクロード」展をご覧になり、「私が感動したのは、多くの人々が見に来られたことです。また、見学者は、ただ単に、『法華経』を見にきたのではなく、『法華経』展に携わった関係者のお心、情熱を感じたのだと思います」との感想を述べられました。

このたびのインドの「法華経——世界の精神遺産」展でも、多くの人々にご覧いただき、これまで法華経に注いでこられた先人の情熱、なかならず、ラグヴェイラ博士、チャンドラ博士等の責き志に触れていただき

たのであります。

そして、法華経の「精神の息吹」と「深き哲理」を世界に発信し、人類の生命力を薫発する良き機会とされることを念願しております。

貴アカデミーの名前の一部にもなっている「文化」の語源は、「耕す」という意味であります。つまり、人間生命、精神の開發が文化の本質であります。

文化と宗教の関係性について、私の恩師・戸田城聖創価学会第二代会長は、「法華経は仏法の真髓であり、民族を復活させ、文化を興隆させる歴史的原動力である」との考えをもっております。

十三世紀に、日本に出現した日蓮大聖人は、「妙法蓮華経」（法華経）の「妙」には、「開く」「円満」「蘇生」の三つの意義が包含されていることを説いております。

「開く」とは、すべての人間に平等に具わっている「仏性」という無限の可能性を、生命の内奥から顕現し開花させていくという働きをさしています。

「円満」には、次のような意味が含まれています。万物はすべて互いに「縁りて起る」関係性にあり、「共

二十世紀を代表する文明史家トインビー博士も、「一文明における宗教は、その文明の生気の源泉である」と述べております。

法華経は限りなき希望の哲理であり、衰亡から繁栄へ、対立から調和へと転換しゆく、「智慧」の源泉がダイヤモンドのごとくきらめいております。

私も皆さまと手を携え、法華経の太陽の光で、二十一世紀の人類に多様な文化を創造し、共生の花々を爛漫と咲かせてまいりたいと念願するものであります。

インド文化国際アカデミーの益々のご発展、そして本日ご出席下さいました皆さまのご健康と栄光と勝利を、心よりお祈り申し上げます。

最後に、万物が仏の生命を呼吸しながら、個性豊かな生を謳歌している「共生の大地のイメージ」をえがいた、「法華経」薬草諭品の一節を贈らせていただきます。

仏の平等の説は 一味の雨の如し

生」しつつ、大宇宙の進展をおこなっています。したがって、「小宇宙」の一個の人間生命には、「大宇宙」の営みそのものが内包されているということなのです。

「蘇生」とは、「内発性」の異名であり、人間自身には常に情性を打破し、創造的生命的ダイナミズムを保ち続ける力が内在しており、その力が万物を蘇生させる源泉となるのであります。

この法華経の「開く」「円満」「蘇生」の法理は、全人類の生命を最高のレベルへと高めていく源泉であり、文化興隆の原動力となりうると思っております。

インドでは、カニジカ王の時代に、法華経を含む大乘仏教の興隆とともにガンダーラ芸術を創出し、東西融合の文化の華を咲かせております。

中国では、天台大師が法華経を根本とした天台宗を開き、その後、仏教の興隆とともに国際的な隋、唐の絢爛たる大文化の華が開きました。

日本では、聖徳太子が仏教を重んじ、飛鳥文化の華が開き、伝教大師が法華経を根本とした日本天台宗を開き、平安文化の開花がありました。

衆生の性に随って 受くる所は不同なること

彼の草木の 稟くる所は各おの異なるが如し

仏は此の諭を以って 方便して開示し

種種の言辞をもつて 一法を演説すれども

仏の智慧に於いては 海の一滴の如し

我れは法雨を雨らして 世間に充満す

一味の法を 力に随って修行すること

彼の叢林 薬草諸樹の

其の大小に随って 漸く茂好を増すが如し

(いけだ だいさく／創価学会インタナショナル会長)